農業地理学の領域

山本正三・手塚　章

Ⅰ　定　義
Ⅱ　観　点
　Ⅱ－1　環境論
　Ⅱ－2　地域論
　Ⅱ－3　空間論
Ⅲ　研究領域
　Ⅲ－1　農業空間形成の自然的基盤
　Ⅲ－2　農業空間形成の歴史的考察
　Ⅲ－3　農業景観
　Ⅲ－4　農村住民の社会経済構造
　Ⅲ－5　社会経済環境と農業
　Ⅲ－6　農業の空間構造
　Ⅲ－7　経営類型と農業地域区分
　Ⅲ－8　農業の地域的研究

今世紀前半に著しい発展を示した人文地理学の中で，農業地理学は集落地理学と並ぶ最も有力な分野の一つであった．その際，農業地理学の学問的な体系化に大きく貢献したのはドイツの学者たちであった．これらの学問的蓄積の集大成とも言うべき成果として，オトレンバの体系的著作を挙げることができる[1]．その後も，このような伝統的な流れに沿った研究が，今日まで引き続き行われてきた．他方，これと並行して，人文地理学一般の革新的風潮に刺激されて，いくつかの新しい試みがなされてきた．

しかし，今日の農業地理学を全体として眺めると，かつて1930年代・1940年代，さらには1950年代に示された学問的活況が失われたことを認めないわけにはいかない．今日の農業地理学は，研究課題や方法について研究者相互の合意が得られないまま，研究努力に継続的な中核テーマが見い出せない状況のように思われる．

本稿では，今世紀を通じて蓄積され，深められてきた農業地理学の学問領域に関する考察を，ドイツ・フランス・イギリスを中心として，その定義・観点・研究領域の3側面から簡潔に整理してみた[2]．このような作業を通じて，農業地理学の今後進むべき道を考えてみたいと，筆者らは考えたのである．

Ⅰ　定　　義

尾留川は農業地理学に対して，「農業経営活動によって形成された地表の科学である」との定義を与えている[3]．これは明らかに，「農業地理学は農業によって形づくられた地表の科学」であるとするオトレンバの定義[4]に基づいている．現在においても，ドイツでは基本的にこの定義が受け入れられており，ＩＧＵ（国際地理学連合）の国際地理学用語委員会によって編集された International Geographical Glossary（国際地理学用語辞典）の中で，「農業地理学」に対しては，ドイツのニッゲマンが上述のオトレンバの定義をそのまま引用している[5]．しかし同時に，農業地理学の位置づけと研究方向について意見の一致が見られず，今日なお論議が絶えないと，彼は付記している．オトレンバの定義は，1930年代・1940年代にドイツを中心として集中的に行われた経済地理学・農業地理学

に対する理論的考察の一つの頂点を示している．元来，農業地理学の確立は今世紀に入ってから見られたものにすぎず，その体系化はたかだか一世代の間に急速になされたものである．

農業地理学の最初のにない手は農学諸分野からの出身者たちであった．エンゲルブレヒト，クルチモウスキーが代表的な学者である．彼らは，農学の不可欠な一分野として，農業地理学を位置づけた．クルチモウスキーによれば，農業地理学は農学における経験的研究部門に他ならず，実験農学と同等の価値を有するとされた[6]．従来の農学が実験研究重視であったのに対して，彼は，複雑な要因によって規定されている農業事象を，現地調査による実態の把握を中心として記載的・経験的に研究することの重要性を強調し，それこそが農業地理学の任務であると主張した．地域農業の克明な記載を重視する彼らにとって，ドイツにおける農業地理学の先駆者は，チューネンではなく，シュベルツ（1759—1844）であった．

クルチモウスキーと類似の観点に立脚するベルンハルトは，農業地理学は農学と地理学の両方に属するものであり，前者からはその研究対象を，後者からはその研究方法を取り入れる，としている[7]．彼はヘットナーの科学体系論に基づき農業地理学を位置づけている．ヘットナーによれば，「現実は3次元の構造をもっており，全体を把握するためには，われわれは三つの異なった視点から現実を考察せねばならない．一つの視点のみからの考察は一面的でしかなく，現実を究めつくすことはできない．第一の視点から，われわれは類縁関係を考察する．また第二の視点からは時間を通じての発展を，第三の視点からは空間における秩序と分布が問題となる[8]．」従来の農学においては，第一の系統的考察と第二の歴史的考察のみが行われ，第三の視点である，地表に展開する空間的現象としての農業の考察が欠落していた．この欠落部分を補うことこそ農業地理学の役割であると，ベルンハルトは主張した．

地理学からの農業地理学に対する理論的・実証的考察は，今世紀の第2四半世紀にとりわけ活発に行われた．今日なお高い価値を有するリュールの先駆的業績[9]に続いて，農業地理学の体系樹立に向け，そのフレームワークを提供したのはヴァイベルであった[10]．彼は，農業地理学における従来の研究方向に加えて，チューネンの農業立地論のもつ地理学的意義を高く評価し，大小さまざまなスケールのチューネン・モデルの適用可能性を論ずるなど，農業地理学のその後の展開に重要な意味をもつ研究の方向づけを行った．

ヴァイベルによれば，農業に影響を及ぼす自然環境要因や社会経済要因に関する因子論的な研究と並んで，農業地理学には統計農業地理学，生態農業地理学，相観（physiognomisch）農業地理学の3部門が存在する．統計農業地理学は，農業統計に立脚して作物と家畜の分布を明らかにし，それらの主要な集中地域を識別したり，地域農業におけるそれらの重要性を認識しようとするものである．このような例として，彼はエンゲルブレヒトの研究[11]を挙げている．この種の統計農業地理学は，それ自体大きな意義をもってはいるが，農業地理学の考察方法としては部分的な価値を有するにとどまり，生態農業地理学により補完されねばならない，とされる．生態農業地理学は，人間が特定の環境の中で，作物と家畜を組み合わせて一つの農業様式を形成する多様な仕方を究明しようとするものである．それゆえ，環境との関連において，農業経営の総体が研究の対象となる．このような例として，彼は

ハーンの経済形態区分の研究[12]を挙げている．しかしながら，ヴァイベルによって真に地理学的な農業地理学とされたのは，相観農業地理学であった．相観農業地理学は農業により規定されている景観像 Landschaftsbild を研究対象とするものである．建造物も道路も農業と関連する限りにおいて農業景観（地域）の構成要素とされた．すなわち，相観農業地理学は農業景観（地域）の学であった．彼は，個々の農業景観（地域）単元を農業群系[13]（Landwirtschaftsformation）と名づけ，現地での調査，観察に基づく記載，農業群系の構造や機能に関する分析（農業群系の生理学），さらには地表における各種農業群系の分布や空間秩序の追求を，相観農業地理学の研究課題として挙げている．

農業群系という用語は，その後の農業地理学の展開の中で広く普及するに至らなかったが，ヴァイベルの農業地理学に関する構想自体は，後の研究者たちに強い影響力を及ぼした．農業地理学の研究対象を，経済事象としての農業に限定することなく，むしろ農業によって規定された地表空間として把握するヴァイベルの見方は，冒頭に引用したオトレンバの定義と相通じている．オトレンバによれば，農業地理学は典型的な境界科学であり，また農業地理学の魅力はまさにその点に存在する[14]．農業は経済形態であると同時に生活形態でもある．それゆえ，農業地理学を文化地理学や集落地理学，社会地理学とはっきり区別して考えることはできないのである．

農業景観（地域）の総合的な把握を目指すこのような地域的アプローチは，フランスにおいても顕著である[15]．フォーシェは農業地理学の性格について，次のように主張している．「農業地理学」は，農業生産のプロセスよりも，その結果により大きな関心を有する．生産物の性質，その獲得の経済的諸条件，農民の生活様式，農村景観の特質とその変容などが，農業地理学に固有の研究対象である．（中略）同様にまた，農業地理学は経済地理学とも異なる。経済地理学においては，生産物の量・用途・流通が主として研究される．その基盤は統計であり，したがって，経済地理学は定量的地理学である．農業地理学は，われわれの理解しているところでは，農業環境や農業活動の形態を記載するものであり，すなわち定性的地理学である[16]．」このような考え方はジョルジュにも基本的に受け継がれている[17]．

地域的アプローチの重視は，今世紀前半の人文地理学を支配したヘットナーやシュリューターの地理学観を反映したものであった．彼らは，地域的（chorologisch）な観点こそが地理学の本質であると考え，現象の単なる分布論的考察を排したのである．ヘットナーは次のように述べている．「歴史学が異なった時代の異なった性格を考察すべきであるごとく，地理学は地表における異なった場所の異なった性格を考察すべきである[18]．」「個々の生産活動や生産物の地理的分布に関する知識は，経済的生産活動の学もしくは商品学に属する．これに対して，経済地理学は異なった地方や場所の経済的特性・連関を追究する[19]．」同様にシュリューターも，経済的な事象を「地表との関連において考察すること」，「個々の生産部門の立地と発展について地理的諸条件の及ぼす影響を考察すること」は「地理的経済学」の課題であり，これに対して経済地理学は，人類によって形づくられた地表を経済的観点から考察するものであると述べている[20]．

他方，農業の空間パターンを研究対象とし，仮説検証的方法と計量的手法を重視する新しい流れが，1960年代以降とりわけアメリカ・イギリスを中心に目立っている．ホワイトは，このような立場から，

農業地理学を「農業活動のパターンが場所によりどのように違うかを，パターンの記載と説明の両面にわたって研究する学問[21]」と定義している．

伝統的な流れと新しい流れの対立は，農業地理学を体系化しようとする際の観点の相違と，強調する側面の異なることから生じている．しかし，グレゴーが述べているように，農業地理学の第一の研究対象が農業の地域的変動（空間的変動と言ってもよかろう）であること[22]は，両者に共通しているように思われる．クルチモウスキーはかつて「農業地理学は，農業の空間的・地域的分布，構造およびその条件を研究することを任務とする[23]」と定義づけているが，新しい流れをも含めて，農業地理学は今日にいたるまで基本的にこの定義の枠内で発展し，構成されてきたと言うことすらできよう．すなわち，地域的アプローチの重視にせよ，空間的パターンの強調にせよ，つまりは農業の空間的・地域的分布，構造およびその条件をどのように地理学的に理解し，把握するかといった，地理学研究の観点の相違に由来するニュアンスにすぎないのである．

II　観　　点

II—1　環　境　論

農業地理学発展の初期に指導的役割を演じた観点は環境論であった．19世紀末以降，急速に増加した農業統計データは，ヴァイベルのいわゆる統計農業地理学を活発化させたが，その際，家畜や作物の分布は主として環境条件との関連で捉えられた．近代農業地理学の基礎を築いたエンゲルブレヒトの研究においても，作物の分布は気候および土壌への依存性の観点から解釈され，自然環境の差異を反映した農業地帯（Landbauzonen）の設定が行われた[24]．この時期の多くの研究者は，農業活動に対する自然的環境の意義を究明することを，研究上の指導理念にしていた．パッサルゲにしても，経済地理学の取扱うべき内容として，地表空間の特性に対する経済現象の依存性と，人類の経済活動による地表空間の変容の両者を挙げている[25]．また，日本においても，西亀正夫は農業地理学の内容を，農業と称する人類活動の一事象を捉えて自然が人間を制約し，人間が自然に順応する相互関係の渾一的景観を研究することと規定している[26]．農業活動を主として自然環境との関係で把握しようとする立場はその後次第に後退したが，地理的諸要因の中で自然環境の役割を重視する見解は依然として重要である．

他方，安易な環境論的解釈をいましめる見解も，長い歴史をもっている．ヘットナーは1907年の論文において，人間と環境の関係を多面的に検討した[27]．彼によれば，「現実に存在する因果的連関を科学的に認識することは，人間の側の諸事実から出発し，それらを分析し，その地理的根底を追究することにより初めて可能である．」なぜなら，「自然条件が所期の影響力を実際に発揮するか否かの決定は，自然の側に存するのではなくて，人間の側にあるからである[28]．」それゆえ，人間と環境の関係を考察する際には，多くの関心をこの関係の人間的側面に向ける必要がある．自然環境は，作物の栽培や土地の保有などの農業的諸事実に重要な関係をもっているが，それらの関係を理解するためには社会環境や経済環境などの人文的環境を念頭におかなくてはならない．

このような観点は，農業地理学においても明確に示されてきた．ジョルジュは，農村空間の考察に

際して，自然環境と農業の関係，人口密度と利用可能な農業空間との関係，および歴史的諸関係という3組の基本的関係にとくに注意を払わなければならないと指摘している[29]．第1の関係について彼は，自然的適性に基づいて規定されている農業空間分化の確認が，農業の地域的差異を考察する際の不可欠な基盤であると述べる一方で，農業と環境との関係の強弱は，農業活動を行う集団の技術水準・組織能力によって大きく異なっていること，作物の自然限界はそれほど厳密なものでないことを強調している．第2の関係は，土地利用の集約度，作物の選択，耕作方法，作物栽培と家畜飼養の関係，集落の形態と立地などに密接に結びついている．人口の変化はそれゆえ農業の変化を引き起こすのであり，現在の農業形態は，このような状況変化に対してなされてきた適応の積み重ねの結果である，と彼は指摘している．第3の関係，歴史的諸関係は，伝統が大きな意味をもつ農村領域においてとりわけ重要である．ひとたび成立した慣行・慣習（たとえば農業慣行や食習慣など）は，状況の変化によって容易に消滅するものではない．当初は自然環境に強く規定されて成立した農業形態でも，やがて歴史的な事実に転化し，農業の性格を逆に規定することになるのである．

環境論的観点は，環境決定論に対する批判と，さらにはこの種の関係を考察するための適切な方法が欠如していたことのために，地理学においてその後表面的には強く主張されることがなかった．しかし，近年に至り，環境論的観点を表立って強調した研究が農業地理学で再び増加してきたように思われる．その一つは，農業を生態系（ecosystem）として把握しようとするものである[30]．このような発想自体は古くから存在したが，その方法は記述的・啓蒙的レベルにとどまっていた[31]．近年における生態系分析の発展は，生態学自体の進歩を反映したもので，生態系内部における各部分間の循環および関係に関する操作的モデルの発達に大きく依存している．もう一つは，生態系概念と関連したテーマとして，食料問題（より一般には環境資源問題）の分析がある．たとえばエイアーは，生態系概念に立脚しつつ，世界の各国について，それぞれの保有する天然資源の豊かさを計算するという野心的な試みを行っている[32]．また，食料生産の効率や農業生産システムの安定性を考察する際にも，生態系概念が有力な分析用具を提供している．

II—2　地　域　論

1930年代以降に著しい発展を示した農業地理学において，地域論的・景観論的観点が前景を占めたことは既述の通りである．1950年前後にあらわれたフォーシェとオトレンバの農業地理学に関する総括的著作[33]は，こうした発展の成果と言えるであろう．オトレンバは，農業空間の構造を把握するために，自然環境・歴史的発展・経済条件・社会条件などの多面的な視点から，研究対象である「農業によって形づくられた地表」を考察している．農業の地域的構造把握を高次の研究目標とする姿勢は，表現こそ異なるものの，ヴァイベルの Landwirtschaftsformation やオトレンバの Agrarlandschaft，さらにはショレーの structure agraire[34] などの概念と，それらを中核理念として構想された農業地理学の内容にはっきり示されている．

農業地域の形態要素（すなわち景観構成要素）を手がかりとして研究を進める傾向が強かった第2次世界大戦前に較べて，1950年代以降においては，異なった社会集団の機能とその地域的意味を重視

する社会地理学的分析が，農業地理学においても目立つようになった[35]．農村住民の社会・経済構造に着目するこのような観点は，従来の農業地理学で卓越していた，文化地理学的色彩を強くもつ集落地理学や，経済地理学の1分野としての狭義の「農業地理学」と，相並びさらにはこれらを凌駕するような発展を示している．シャピュイは，農村空間の地理学的把握におけるこれら観点の相違を，学問分野の呼称の変化と関連づけて説明している[36]．すなわち，伝統的な景観論的観点に対応する géographie agraire は，20世紀中葉までのフランス地理学を特徴づけるものであった．1950年代・1960年代には，géographie agricole が活発になり，農業空間の経済的分析にとりわけ力が注がれ，立地論研究・経営体分析が進んだ．これに対して，近年の研究の重点は農村空間の多様な機能を分析することに置かれ，géographie rurale という呼称が一般的である．このようなシャピュイの見方は，農業地理学の後継者として「農村空間・農村景観の複合地理学」を提唱したイレシッチの観点とも呼応している[37]．

農業地理学から農村地理学への重心の移動は，近年の都市化にともなう農村空間の変質を背景としている．先進資本主義諸国において，農村空間はもはや農業空間の代名詞ではない．農村住民の中で，農民はむしろ少数派であることが多い．それゆえ，農村地域を理解するためには，非農業的要素の分析が不可欠となる．一方，農業活動や農民の地域的性格を理解するに際しても，このような農村空間の変質を念頭において分析することが必要である．農村空間の変質と並行して，農業それ自体も変化しているからである．近年の農業地理学の傾向として，近代化・都市化にともなう農業の変化を取扱った研究が多く見られるのも，このような事情を反映している．ボウラーは，最近とりわけ注目を集めている研究テーマとして，①農業規模の拡大や経営体間の格差拡大などにみられる農業構造変化，②農地の喪失や園芸農業の発達など，都市化と農業の諸関係，③農業に対するさまざまな行政レベルでの政策的介入の問題，④兼業農家の増加とその農業的意味，の4つを指摘している[38]．これらのテーマのいずれもが，農村地域の動態的把握を重視する，今日の農業地理学の一つの傾向を示している．

II—3 空間論

空間的観点の重視は，地理学の歴史の中でしばしば見られたことであり，19世紀末のラッツェルにおいて特に顕著であった[39]．しかし，伝統的な地域尊重の地理学に疑問を投げかけ，空間理論を重視する地理学の流れが，イギリスやアメリカ合衆国を中心として活発化したのは1950年代以降のことである．農業地理学においても，土地利用の空間パターンを初めとして，農業活動のパターンを把握・説明しようとする空間重視の傾向が強まったことは既述のとおりである．

空間的アプローチを強調する地理学のもう一つの特徴は，それが理論やモデルの構築を志向し，同時に統計的・数学的手法の導入に熱心だったことである．一般法則の追究は，少数の独立変数だけを孤立化して取扱うことにより初めて可能であることから，総合的性格の解明と記述をめざす地域的アプローチが，そのような研究の方法として不適当なことは明白であった．理論重視，法則追究の一般的風潮の中で，1960年代以降，理論的・空間的アプローチの農業地理学への適用と普及は急速であった[40]．1971年に出版されたモーガンとマントンの「農業地理学[41]」は，農業地理学のうち経済的側面

と空間パターン・空間理論の説明に終始しているが，この分野における理論地理学的方法の将来性を十分にうかがわせるものである．

農業活動の空間理論としては，チューネンの研究[42]が有名である．チューネン理論の地理学的意義については，すでにヴァイベルにより入念な考察がなされたが，空間的アプローチの発展にともない，イギリスやアメリカ合衆国の地理学者たちの間でも新たに大きな脚光をあび，それ以降チューネン理論に基づく研究が多数にのぼっている[43]．わが国においては，チューネン圏モデルを分析用具として，早くも大正末期から昭和10年代にかけて青鹿四郎が農業の地域分化の研究を行っており[44]，これは特筆に値することである．一方，チューネン圏モデルとは対照的に，都市化環境の下で都市縁辺部に逆チューネン圏とも言うべき空間パターンが現われるとするシンクレアのモデルが提出されている[45]．

チューネン理論に刺激を受けて発展した農業立地の理論的研究は，その後農業的土地利用パターンの成立に影響を及ぼしている多様な因子の理論的分析へと研究の幅を広げている．ヘーエルストラントによるイノベーションの拡散研究[46]は，農業空間を動態的に把握する一つの枠組を提供しており，類似の視点にたつ研究を数多く生み出した．他方，農民の意志決定プロセスに注目して，非経済的要因の重要性を論じた研究も多数にのぼる[47]．農業に関する人間行動の合理性を前提とするチューネン理論は，このようにして，より多様で現実的な人間行動に基づく複雑な立地モデルへと発展した．しかし現在までのところ，立地論を中核とする理論的・空間的アプローチは，農業地理学において完全に卓越する地位を占めるまでには至っていない．「空間的パターンの抽象化の程度が高まるにしたがって，不毛な幾何学的パターンに対するのめりこみの危険[48]」が現実化しており，このような傾向に対する批判は農業地理学の伝統を考えれば当然である．地域農業の実態把握から出発する経験的・実証的研究と，仮説的なモデルを用いての理論的な研究との間には，いまだに大きなギャップが横たわっている．

Ⅲ　研　究　領　域

研究対象がきわめて多岐にわたり，豊富な内容をもつことと，その研究が実証的な方向と理論的・一般的な方向の両面をもち，その方法も形態論的，発生論的，機能論的などさまざまなものを含んでいること，さらに研究技術の上でも地図や図表の利用，統計的・数学的解析，計述的方法といった多様な手法を発達させてきた結果，農業地理学の研究領域はきわめて多方面にわたっている．ここでは，特定の分野にかたよることを避け，農業地理学の歴史を通じてこれまでとりあげられてきた主要な研究領域について若干述べてみたい．

Ⅲ―1　農業空間形成の自然的基盤

農業的に利用されている地表の範域を画定すること，すなわち人類の農業的活動領域を明らかにすることは，農業地理学研究の基礎をなす作業である．農業空間画定へのアプローチとして，いわゆる農業限界の性格を検討し，農業活動を制約している自然環境条件を類型的に把握する試みがなされてきた．オトレンバは農業限界の種類として，海洋限界・極限界・乾燥限界・高距限界・森林限界・湿

潤限界をあげ，それぞれについて農業地理学的意味を論じている[49]．アンドレーは，これらに加えて，土壌限界・傾斜限界・日照限界の性格に触れている[50]．これらの自然限界は技術の進歩にともなって変化するが，他方において，現実の農業限界を理解するためには，自然的限界とともに経済的限界を考慮すべきであることが指摘されている．

自然的基盤の中で第一にとりあげられてきたのは気候である．農牧業は，選び出された特定の動植物により，気候に支えられ土壌を利用することによって成立するものである．土壌は気候条件によってその性質を基本的に規定されるので，気候が農業の第一の基礎条件と言える．アンドレーはこのような観点から，気候条件の農業地理学的意義を考察し，同時に気候帯ごとに農業活動の地域的特性を検討している[51]．土壌は全地球的規模で農業活動を制約するだけでなく，こまかな変化を通して，きわめて大きな影響を土地利用に与えている．西ヨーロッパのレス土壌，熱帯の火山性土壌と，それらの分布地域における農業発達との関係については，これまでに多くの研究が試みられてきた．農業生産はかなりの程度まで水の供給に依存している．水の供給，すなわち灌漑に関しては，灌漑の様式，その社会的組織や景観などについて，多大の関心がはらわれてきた[52]．他方，低湿地や干拓地においては排水が大きな課題であり，北海沿岸の干拓地や低湿地についての詳細な地理学的研究が試みられてきた[53]．

Ⅲ―2　農業空間形成の歴史的考察

世界の農業地域配置とその地域的特色の形成に際しては，栽培作物や家畜の原産地からの伝播と，農耕・牧畜技術の伝播が重要な役割を果している．食習慣も同様に重要な要因である．栽培作物と家畜の世界的な伝播・移動には3つの大きな方向が認められる[54]．①旧大陸温帯の作物と家畜の外延的拡大，②新大陸の作物のヨーロッパへの導入，③熱帯内部における熱帯作物の移動がそれである．ユーラシア大陸で最も重要な作物の多くは，東南アジアやオリエントにその栽培の起源があるが，ヨーロッパと東アジアで発展の場を見い出した．そして特にヨーロッパから新大陸の温帯へと拡まった．新大陸温帯の農業は，ヨーロッパの作物と家畜に基礎をおいて形成された．他方，新大陸の作物（トウモロコシ，ジャガイモなど）は，ヨーロッパのみならず東アジアでも農業空間の重要な構成要素となっている．マニオク，コーヒー，さとうきびなど，今日の世界経済で重要な意義をもつ作物が，熱帯内部で広く拡散したのは16世紀以降のことである．農耕文化の起原と伝播に関する問題は，農業地理学の最も伝統ある研究領域の一つで，文化地理学的観点に主眼をおく重要な研究文野になっている[55]．

イノベーションの拡散とそれによる農業の変化は，近年の農業地理学においても重要な研究テーマの一つである[56]．「緑の革命」の推移とそれにともなう地域農業の変化は，インドや東南アジアをフィールドとして，数多くの研究を生み出した．また，ハイブリッドコーンの普及や，肉用牛であるアバディーン・アンガス種の南米への導入，さらには牛や羊の伝染病である口蹄疫の拡散など，さまざまな農業事象に拡散研究の方法が適用されている．近年の研究の特徴は，イノベーションの受容過程に強い関心が向けられていることで，個々の農民の属性や社会環境との関連で，イノベーションの拡

散が検討されることが多い．この点で拡散研究は，農民の意志決定プロセスを解明しようとする行動論的アプローチとも一部結びついている．

Ⅲ—3　農業景観

農業活動が展開される外見的様相あるいは農業活動によって形づくられる景観は，農業の空間的分化の実態を具体的に示すものとして，きわめて多くの研究を喚起してきた領域である．農業景観の構成要素としては，土地利用・農地形態・集落形態・家屋形態・道路網などがとりあげられ，綿密な分析の対象とされてきた[57]．集落と耕地の形態および分布に関する研究は，人文地理学の中で最も伝統のある研究領域であり，この面での農業地理学の研究は歴史地理学，文化地理学，集落地理学と重なり合う部分が多い．農業景観は，主として形態的側面と機能的側面から分析される[58]．前者においては，景観構成要素の分布や成立過程が検討され，発生論的観点から分析されることが多い．これに対して後者は，土地利用システムや市場との関連など，農業の全体的な空間秩序との関連において，農業景観を機能的に考察しようとするものである．

土地利用の地図化は，農業地理学研究で常に重視されてきた調査手法である．とりわけドイツにおいては，微細な土地利用の詳細な地図化が，実態分析のための重要な手がかりとして，多くの研究者により実施されている[59]．社会的休閑地（Sozialbrache）の研究に示されているように[60]，土地利用に現れた農業景観の変化から，農村空間で進行しつつある重要なプロセスを把握しようとする態度は，ドイツのみならず農業地理学に共通のものと言えよう．ボナムールは，現地での観察および地図との対話を，農村研究に不可欠な方法としているが[61]，このことからも明らかなように，農業景観は研究の対象であると同時に，農業地理学研究の重要な手引きなのである．

Ⅲ—4　農村住民の社会経済構造

土地所有の状態によって決められる社会構造が，農業活動の性格と強く関連していることは，あえて強調するまでもない。農地の形状や分散の仕方，屋敷の形態などに代表される農業景観をはじめ，農業就業形態（自営，農業労働者など），経営形態（小農経営，小作経営，コルホーズなど），さらには土地利用や生産物の種類にまで，農村の社会経済構造は直接，間接に関係している．土地所有構造と関連して，古くから注目を集めたもう一つの研究テーマは，農家の経営規模構造であった．歴史的にみれば，土地の所有構造や経営規模は国家の政策によって大きく変化するものである。ドイツにおける均分相続制地域と一子相続制地域のコントラスト，アメリカ合衆国における自作農創設法（Homestead Act）の制定，社会主義諸国における集団農場化，わが国における農地改革など，この種の事例は枚挙にいとまがない．経営規模を生産活動の成果とみる視点を含め，その意義と機能を解明することから農業の地域的分化の実態にせまる研究は，ジョルジュなどフランス社会経済地理学派にとりわけ顕著である[62]．

農民層の分解に関する研究は，ドイツ社会地理学派をはじめ，農業地理学でも活発に行われてきた．近代化・機械化にともなう農業経営の革新は，一方において大規模農業あるいは集約的施設型農業と

いった企業的農業経営を多数出現させたが，他方では脱農や兼業化の傾向を促進した[63]．近代的農業経営の成立にともない，中世的な農地構造（ゲヴァン耕地，交錯圃など）や村落構造は大きく変貌した[64]．村落共同体の解体傾向や，機能的な結合に基づく新しい村落秩序の形成過程は，社会学者ばかりでなく，地理学者にとっても重要な研究テーマとなっている．農村社会学や農村経済学との境界領域で，強い関心を集めているテーマに兼業農家の問題がある．兼業は，日本のみならずヨーロッパ各国で大きな農業問題になっており，その意義や農業生産にもたらす影響などが活発に論じられている[65]．

Ⅲ―5　社会経済環境と農業

市場価格，労賃水準，資本の蓄積状況などの経済的要因が，農業活動の内容に与える影響はきわめて大きい．一方，大都市や人口集積地域は，大消費市場として周囲の農村に大きな影響を及ぼす．後者については，チューネンの農業立地論を理論的根拠とする空間秩序がさかんに検討されてきた．農業集約度の分布と経営形態の立地配置に関する実態把握および理論的検討の試みは，空間経済学と経済地理学の境界領域で，地理学の側でも数多くの研究蓄積がある[66]．一方，人口の分布は，消費を通して農業活動に影響を与える．消費人口の増加は需要の増加をもたらし，農業空間の拡大と土地利用の集約化を引き起こす．農村地域での過剰人口は，農地に対する人口圧を高め，経済規模の零細化や土地の荒廃に結びつく例が少なくない．また近年においては，都市化地域の拡大にともなって，土地利用の競合と農地の転用に関心が集まっている．かつて近郊農村は集約農業地帯の代名詞であったが，都市化時代における近郊農業の特性を再吟味する試みが各地で行われている[67]．

農業生産活動に大きな影響力を及ぼしている非経済的要因についても，従来から多くの研究蓄積がある．民族性や文化，宗教，パーソナリティーなどは，文化人類学や農村社会学の関心事であるだけでなく，地理学にとっても見すごすことのできない重要な研究課題といえる．アメリカ合衆国やカナダの農業の地域的特性を説明する際に，所属宗派や農民の出身地（ドイツ系移民，イタリア系移民など）が大きな意味をもつことが，この種の要因の重要さをもの語っている[68]．中でも近年とりわけ注目を集めているのは，さまざまな行政レベルでの政策的介入と，それらが農業にもたらす影響の問題である[69]．土地利用規制や農業補助金などをとりあげて，それらの行政的施策が農業に及ぼした影響を分析する実証的な研究と並んで，今日では，農業政策の評価や提言に直結する応用地理学的研究が活発である．研究の社会的応用を志向する動きは，地理学一般の傾向でもある．

Ⅲ―6　農業の空間構造

農業の空間組織や機能的空間単元に関する研究は，一般に農産物の流動の考察に基づいている．近年における農業空間組織の研究としては，チューネン理論に基づく農業集約度もしくは土地利用形態の圏構造的地域分化を，実証的に示そうとした諸研究をまずあげることができる．このような地域分化パターンは，農場レベル，集落レベル，都市レベルから，全世界規模のものまで，大小さまざまなスケールで広く認められている[70]．空間組織研究のもう一つの方向は，個々の農産物について，その

生産地域の空間構造を流通や加工や市場との関連でとらえようとするものである．酪農地域の空間組織研究はその代表的なものと言えよう[71]．広域スケールでは，農産物の世界的な流通・貿易を通して，このような空間組織が形成されている．

農業の空間構造に関するアプローチは，農業地理学成立の初めにまでさかのぼることができる．農業地理学の先駆的形態はいわゆる農業誌であった．経済地理学の発達につれて，農業誌の内容は，農産物の生産・流通・消費の地域的展開を具体的に記述，説明することに重点をおくようになった．このような商品地理学的な観点は，1930年代前半までの農業地理学において，かなり大きな部分を占めるものであった．今日でも，この種の研究分野は否定できない重要な存在意義を有している．単一あるいは少数の作物や家畜が，卓越的要素として農業空間の形成に大きな役割を果している場合，このような観点はとくに重要である．コーヒー，さとうきび，ゴム，茶などのプランテーション地域や，わが国の水田単作地域における米作などがそのようなケースにあたるであろう．単一の作物の栽培地域の中にも空間的な分化がみられる場合が多く，自然条件が一様でも，対市場位置の関係から農業集約度に地帯分化が出現するのが普通である．

Ⅲ―7　経営類型と農業地域区分

世界全体，大陸，国，地方など，扱われるスケールはさまざまであるが，特定の指標に基づいて農業地域の画定を試みる，いわゆる農業地域区分の研究は，農業の空間的多様性を把握しようとする際の最も伝統的な方法であったように思われる．エンゲルブレヒトやウィットルセーなどの古典的な農業地域区分や，ハーン，フリードリッヒ，グレゴーなどの経済形態による地域区分などは，世界全体を対象とした小スケールでの研究である[72]．また，アンドレー，ボナムール，コポックは，農業経営形態の地域的差異に基づいて，それぞれドイツ，フランス，イギリスの農業地域区分を試みている[73]．農業生産に関する意志決定の基礎単位は多くの場合農家であるため，個別農家を対象にして農業経営類型の設定を試みた研究も数多く行われている．

これらの地域区分もしくは類型区分は，農業活動の目標（自給，販売，供出など），農業技術水準，栽培作物と家畜の種類，生産方法とその集約度，投下労働量など，さまざまな要素を指標として，単独あるいはそれらの組み合わせにより決定される．しかし，これらの諸要素の在り方は，それぞれが全く無関係なものではなく，一般には互いに関連した一定のセット（要素複合）を成していると考えられる．農業地域区分の根底には，このような考え方が多くみられ，農業技術に基づく類型（犁耕，鍬耕，園耕，牧畜，移牧，灌漑耕作，樹木耕作など），農業の経済的指向性を根底におく類型（自給的，商業的，集団的），農村の社会・文化的特質による類型（部族的，小農的，資本主義的，社会主義的）などもそのような観点からとらえることができる．最近では，とかく直観的，主観的であったこのような類型設定を，客観的方法によって実施しようとする試みが，コストロヴィッキを中心にして進められた[74]．

III－8 農業の地域的研究

農業地誌は特定の地域の農業を系統だてて記述，説明しようとするもので，地域農業を総合的にとらえようとするものや，農業活動の特定の側面や問題を中心に考察のなされるものなど，さまざまな形で研究が進められてきた．経済活動の中で農業が卓越しており，また農業景観の卓越する地域の記述は，地域地理学の立場での農業地誌と言ってもさしつかえないかもしれない．このような地域地理学的農業地誌は，今世紀前半のフランスで最も著しい発達を遂げたが[75]，系統地理学的農業地誌の研究と並んで，農業地理学の発展の上で不可欠のものと言えよう．

現代の農村は，かつてない激しい変貌に見舞われている．したがって，その地域的考察にあたっては，とくに動態的な視点が要求される．地域農業の類型把握や機能構造の解明といった伝統的課題に加えて，その病理の認識や，それへの対策の提言にまで，農業地誌研究の課題が広がっていることは明らかである．モルバン地方における農村の貧困を分析したボナムールの研究[76]や，農業地誌に比較研究の視点を導入し，さらに農業改良の立場から現状の批判および改善策の立案を志向するデュモンの研究[77]などは，この分野におけるすぐれた指針を提示しているように思われる．

注・参考文献

1）Otremba, E. (1960) : *Allgemeine Agrar-und Industriegeographie*〔増補改訂版〕. Stuttgart.（藪内芳彦訳『一般農業地理学』，1957年，朝倉書店．ただし本訳書は原著第1版の前半部を訳したものである）

2）ドイツとフランスの農業地理学の発展動向については，次の論文で触れられている．

尾留川正平（1973）：農業地理学体系樹立の系譜，地理学評論，**46**．769～777.

石井素介(1980)：ドイツにおける農業地理学発展の動向――レオ・ヴァイベルの方法をめぐって――．駿台史学，50号，250～267.

手塚　章(1980)：フランスにおける農村地理学の動向．地学雑誌，**89**，297～313.

3）日本地誌研究所編『地理学辞典』，1973年，二宮書店，p. 599.

4）前掲（1），p. 25.

5）Meynen, E.〔ed.〕(1985) : *International Geographical Glossary*. Stuttgart, p. 694.

6）Krzymowski, R. (1911) : Die wissenschaftliche Stellung det Landwirtschaftsgeographie. *Fühlings Landwirtschaftliche Zeitung*, H. 8, p. 252.

7）Bernhard, H. (1915) : Die Agrargeographie als wissenschaftliche Disziplin. *Petermanns Mitteilungen*, **61**, 12～18.

8）Hettner, A. (1927) : *Die Geographie――ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden――*. Breslau, p. 114.

9）Rühl, A. (1929) : *Das Standortsproblem in der Landwirtschafts-geographie (das Neuland Ost australien)*. Berlin.

10）Waibel, L. (1933) : *Probleme der Landwirtschaftsgeographie*. Breslau.（伊藤兆司訳『農業地理学の諸問題』，1942年，古今書院）

11）Engelbrecht, H. (1899) : *Die Landbauzonen der aussertropischen Länder*. Berlin.

12）Hahn, E. (1892) : Die Wirtschaftsformen der Erde. *Petermanns Mitteilungen*, **38**, 8～12

13）群系（Formation）は植物地理学の用語で，明確な景観的・地域的特徴を有する植物複合体を意味する．

14）前掲（1），p. 26.

15）手塚　章（1980）：前掲（2）.

16）Faucher, D. (1949) : *Géographie agraire――types de cultures――*. Paris, p. 10

17）George, P. (1956) : *La campagne――le fait rural à travers le monde――*. Paris.

18）Hettner, A. (1905) : Das Wesen und die Methoden der Geographie. *Geographische Zeitschrift*, **11**, p. 558.

19) 前掲 (18), p. 559.

20) Schlüter, O. (1906) : *Die Ziele der Geographie des Menschen*. München. 31～33.

21) Johnston, R. J. [ed.] (1981) : *The dictionary of human geography*. Oxford. p. 6.

22) Gregor, H.F.(1970) : *Geography of agirculture : themes in research*. Englewood Cliffs, p. 2. (山本・朝野・斎藤訳『農業地理学』, 1973年, 大明堂)

23) クルチモウスキー『改訂農学原論』(橋本伝左衛門訳), 1954年, 地球出版株式会社, p. 247. (原著は1919年に出版されている)

24) 前掲 (11).

25) Passarge, S, (1926) : *Die Erde und ihre Wirtschaftsleben*. Hamburg,

26) 西亀正夫『農業地理学』, 1931年, 古今書院.

27) Hettner, A. (1907) : Die Geographie des Menschen. *Geographische Zeitschrift*, **13**, 401～425.

28) 前掲 (27), p. 413.

29) 前掲 (17), 7～9.

30) 例えば次のような著作があげられる.

Simmons, I. G. (1974) : *The ecology of natural resources*. London.

Simmons, I. G. (1979) : *Biogeography : natural and cultural*. London.

Bayliss-Smith, T. P. (1982) : *The ecology of agricultural systems*. London.

31) Stoddart, D. R. (1967) : Organism and ecosystem as geographical models. Chorley, R. J. and Haggett, P. [ed.] : *Models in Geography*. London. 511～548.

32) Eyre, S. R. (1978) : *The real wealth of nations*. London.

33) 前掲 (1), (16).

34) Cholley, A. (1946) : Problèmes de structure agraire et d'économie rurale. *Annales de Géographie*, **60**, 81～101.

35) ドイツ社会地理学の動向については次の論文が参考になる.

Hajdu. J. G. (1968) : Toward a definition of post-war German social geography. *Ann. Ass. Am. Geogr*. **58**, 397～410.

山本健児(1981) : ある社会地理　の軌跡——ハルトケ学派の場合——. 人文地理. **33**, 334～351.

36) Chapuis, R. (1984) : De la géographie agraire à la géographie rurale. 25e Congrès International de Géographie, *Résumés des communications (Tome I)*, Thèmes 19-3. Paris.

37) Ilešič, S. (1968) : Für eine komplexe Geographie des ländlichen Raumes und der ländlichen Landschaft als Nachfolgerin der reinen „Agrargeographie". *Münchner Studien zur Sozial- und Wirtschaftsgeographie*, Bd. 4, 67～74.

38) Bowler, I. R. (1984) : Agricultural geography. *Progress in Human Geography*, **8**, 255～262.

39) シュタインメツラー『ラッツェルの人類地理学——その課題と思想——』(山野・松本訳), 1983年, 地人書房.

ヘットナーはラッツェルの空間論的観点を批判して次のように述べている.「そこには自己欺瞞が隠されているように, 筆者には感じられてならない. 空間それ自体はものごとを見る一つの型にすぎない. 空間が真の意味をもつのは, その中味との間係においてだけである.」[前掲 (18), p. 559]

40) 例えば次の論文・著作を見よ.

Harvey, D. W. (1966) : Theoretical concepts and the analysis of agricultural land use patterns in geography. *Ann. Ass. Am. Geogr.*, **56**, 361～374.

Henshall, J. D. (1967) : Models of agricultural activity. Chorley, R. J. and Haggett, P. [ed.] : *Models in Geography*. London. 425～458.

Found, W. C. (1971) : *A theoretical approach to rural land-use patterns*. London.

41) Morgan, W. B. and Munton, R. J. C. (1971) : *Agricultural geography*. London.

42) Thünen, J. H. von (1826～1863) : *Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie*. Berlin. (近藤康男訳『農業と国民経済に関する孤立国』, 1929年, 成美堂)

43) 詳しくは次を参照せよ.

Chisholm, M. (1979) : *Rural settlement and land use : an essay in location*. [3 rd. ed.], London.

44) 青鹿四郎『農業経済地理』, 1935年, 叢文閣.

45) Sinclair, R. (1967) : Von Thünen and urban sprawl. *Ann. Ass. Am. Geogr.*, **57**, 72～87.

46) Hägerstrand, T. (1967) : *Innovation diffusion as a spatial process*. Chicago. (これは英訳本であり, 原著の出版は1953年になされている)

47) Ilbery, B. W. (1978) : Agricultural dicison--making : a behavioural perspective. *Progress in Human Geography*, **2**, 448～466.

48) Taaffe, E. J. (1974) : The spatial view in context. *Ann. Ass Am. Geogr*, **64**, p. 10.

49) 前掲 (1), 79～91.

50) Andreae, B. (1983) : *Agrargeographie —— Strukturzonen und Betriebsformen in der Weltlandwirtschaft*. Berlin. 58～79.

51) 前掲 (50).

52) 例えば最近では次の著作がある.
Conac, F. (1978) : *Irrigation et développement agricole*. Paris.

53) Wagret, P. (1959) : *Les Polders*. Paris.

54) 前掲 (1), p. 142.

55) Sauer, C. O. (1952) : *Agricultural origins and dispersals*. New York. (竹内・斎藤訳『農業の起原』, 1960年, 古今書院)
Isaac, E. (1970) : *Geography of domestication*. Englewood Cliffs. (山本・田林・桜井訳『栽培植物と家畜の起源』, 1985年, 大明堂)
Grigg, D. B. (1974) : *The agricultural systems of the world : an evolutionary approach*. London. (飯沼・山内・宇佐美訳『世界農業の形成過程』, 1978年, 大明堂)

56) 前掲 (46).
Jones, G. E. (1967) : The adoption and diffusion of agricultural practices. *World Agricultural Economics and Rural Sociology Abstracts*, **9**, 1～35.

57) Lebeau, R. (1979) : *Les grands types de structures agraires dans le monde*. [3 rd. ed.], Paris.
Lienau, C. und Uhlig, H. [ed.] (1978) : *Materialien zur Terminologie der Agrarlandschaft : Vol. I Flur und Flurformen*. [2 nd. ed.], Giessen.
Uhlig, H. [ed.] (1972) : *Materialien zur Terminologie der Agrarlandschaft : Vol. II die Siedlungen des ländlichen Raumes*. Giessen.

58) Carol, H. (1952) : Das agrargeographische Betrachtungssystem. *Geographica Helvetica*, **7**, 17～67.

59) 朝野洋一(1975) : 農業地理における「小空間の地図化」について. 地理学評論, **48**, 553～559.

60) Hartke, W. (1956) : Die „Sozialbrache" als Phänomen der geographischen Differenzierung der Landschaft. *Erdkunde*, **10**, 257～269.

61) Bonnamour, J. (1973) : *Géographie rurale —— méthodes et perspectives ——*. Paris. 49～59.

62) 前掲 (17).

63) Bowler, I. R. (1983) : Structural change. Pacione, M. [ed.] : *Progress in rural geography*. London. 46～73.

64) Ernst, E. (1967) : Veränderungen in der westdeutschen Kulturlandschaft durch bäuerliche Aussiedlungen. *Geographische Rundschau*, **19**, 369～382.

65) GeoJournal の第6巻 (4号) は兼業問題の特集号となっている. *GeoJournal*, **6**, 283～389.

66) 前掲 (41).

67) Munton, R. J. C. (1974) : Farming on the urban fringe. Johnson, J. H. [ed.] : *Suburban growth*. London. 201～223.
Berger, M., Fruit, J.-P., Plet, F. et Robic, M.-C. (1980) : Rurbanisation et analyse des espaces ruraux péri-urbains. *L'Espace Géographique*, **9**, 303～313.

68) 前掲 (22), 72～78.

69) Bowler, I. R. (1979) : *Government and agriculture : a spatial perspective*, London.

70) 前掲 (43).

71) 斎藤 功(1971) : 東京集乳圏における酪農地域の空間構造. 地理学評論, **44**, 271～283.

72) これらの地域区分については次の論文で比較検討されている.
Grigg, D. (1969) : The agricultural regions of the world : review and reflections. *Economic Geography*, **45**, 95～132.

73) Andreae, B. (1983) : 前掲 (50).
Bonnamour, J. et Gillette, Ch. (1980) : *Les types d'agriculture en France* 1970 ——*essai méthodologique*——. Paris.
Coppock, J. T. (1964) : *An agricultural atlas of England and Wales*. London.

74) Kostrowicki, J. (1979) : Twelve years of activity of the IGU Commission on Agricultural Typology. *Geographica Polonica*, **40**, 235～253.

75) 手塚 章 (1980), 前掲 (2).

76) Bonnamour, J. (1966) : *Le Morvan ——la terre et les hommes——*. Paris.

77) Dumont R. (1951) : *Voyages en France d'un agronome*. Paris.
Dumont, R. et Ravignon, F. de (1977) : *Nouveaux voyages dans les campagnes françaises*. Paris.

The Domain of Agricultural Geography

Shozo YAMAMOTO and Akira TEZUKA

During the first half of the twentieth century and even in the 1950's and the 1960's, agricultural geography was one of the most intensively studied fields in human geography, along with the field of settlement geography. In this period, varied methodologies and approaches were developed and applied to various kinds of research topics. In this essay, we have tried to examine and put in order these diverse directions of research, briefly in terms of the definition of the field, approaches and research topics.

Definition. Different opinions about the definition of the field reflect mainly different approachs and viewpoints to the systematization of the domain of agricultural geography. In all cases, however, the areal variation of agriculture is regarded fundamentally as the primary object of geographical study. Krzymowski (1919) defined the field in early days as follows: "The agricultural geography seeks to study the spatial (areal) distribution of agriculture, its structure and their conditions." Until to the present, agricutural geography has been developed and organized essentially in the framework of this definition.

Approaches. Ecological approach, regional approach and spatial approach are of great importance to the development of agricultural geography, as in human geography in general. Ecological approach, which emphasizes the relationships between agricultural activities and natural environments, was dominant in the eary stage of development. In recent years, an increasing attention has been payed again to this type of studies, which has been often connected with the concept of ecosystem. Regional approach and landscape approach became dominant from the 1930's. While in the inter-war period the starting point of many studies were the morphological elements of agricultural landscape, the function of different social groups and its regional implications have been more and more emphasized in the post-war period. Spatial approach appeared to the foreground of the field from the 1950's, mainly in England and United States. Under this direction, the construction of formal theories and operational models has been aspired and the application of statistical and mathematical methods eagerly pursued. There exists a considerable gap between the spatial approach and the traditional one which starts from the actual states of regional agriculture.

Research topics. In the development of agricultural geography, following themes have been taken up and studied as major research topics: (a) natural and physical conditions for the formation of agricultural areas, (b) historical background of the formation of agricultural areas, (c) agricultural landscape, (d) socio-economic structure of rural population, (e) relations between agriculture and socio-economic environment, (f) spatial organization of agriculture, (g) typology and regionalization, and (h) area study of agriculture.